

戦前の地質調査所の標本展示

坂本 亨¹⁾

地質標本館が筑波に開館して、早くも10年目を迎えることとなります。心からおめでとうと言わせて頂きます。地質調査所110年の歴史において、その展示施設がこんなに長期にわたって連続して公開されてきたのは、実は初めてのことなのです。調査所の歴史は、明治以来の日本の近代史の荒波にもまれ続けてきた歴史といえますが、その中で公開展示施設はもっとも端的に社会の推移を反映してきた部門です。地質標本館は、現在、その最長連続開館記録を日々更新しています。この記録更新がいつまでも続くことを念じて止みません。今回、標本館の開館10周年を記念して戦前の調査所の公開展示の歴史をと依頼されたのを機会にそのことを含めて書いてみたいと思います。

戦前のことを書くといっても、もとより私が戦前のあれこれを承知しているわけがありません。ここではもっぱら、戦前の「地質要報」に掲載された各年度の事業報告にもとづいて述べることにします。また、「地質調査所百年史」ほかも参照させて頂きました。

1. 木石陳列所・地質課列品室 時代

1882年(明治15年)地質調査所が設立される以前に、その前身ともいべき機構があったことはよく知られています。内務省の地理寮木石課(すぐ後で山林課と改名, 1874—78)がその第1であり、地理局地質課(1878—82)がその第2です。そして、この前身時代に、地質標本館の前身ともいべき標本展示施設がすでに存在していました。木石課(山林課)当時のものは、「木石陳列所」と呼ばれていました。明治43年度の事業報告に「鉱物陳列館は明治7年1月内務省地理寮に山林及土石の標本を木石陳列所の一部に陳列したるに創まり……」と記されているのがそれです。

当時の「木石陳列所」がどんな規模・内容・性格のものであったのか、今となっては詳しいことは分りません。ただ、その展示品では、土石課→山林課→地質課と

出仕し、日本各地の物産調査を精力的に遂行していった白野夏雲の採集品が主要なものであったようです。江戸時代以来の本草学者の雰囲気の色濃く残し、熱心な鉱物収集家であった白野夏雲の波乱にとんだ生涯については、地質ニュースの no.346(1983)に佐藤博之氏の詳しい紹介があります。この人こそ地質標本館の第一の先覚者として顕彰されるべき人物かもしれません。

1878年(明治11年)、地理寮の中で地質課が山林課から分離、独立しました。ここに初めて、日本全国の地質調査を主たる任務とする機構が成立したわけです。その時、地質課の事務所は木石陳列所内に置かれたといえます。地質調査所(の前身)は標本館(の前身)から生まれたといっは、卵がニワトリを生んだことになるのでしょうか。

地質課独立の後、1880年(明治13年)1月には、展示施設は赤坂区葵町に新築され、「地質課列品室」と呼ばれるようになりました。ただし、その実態については、「狭小にして僅に参考品の一部を陳列するに止まり縦覧を許さず……」と前記の事業報告に伝えるところです。これから見ると、木石陳列所当時は公開であったものが、列品室になって非公開に変わったのではないのでしょうか。

このように、地質調査所の前身時代からすでに、地質関係の展示施設があったということは、実に驚くべきことです。これらの展示施設設置の理由は、一つには、明治の中央集権政府が成立して、近代化への道を慌ただしく踏み出すにあたって、諸国の物産を統一的に把握する必要があり、そのために一つ一つの物産について全国共通の名前を付ける必要があったためではないのでしょうか。

2. 鉱物陳列館 時代

1882年(明治15年)、地質調査所は設立されました。しかし、その後長い間、標本類の公開展示は行われませんでした。「庁舎狭小のため」でしょう。「已むを得ず所

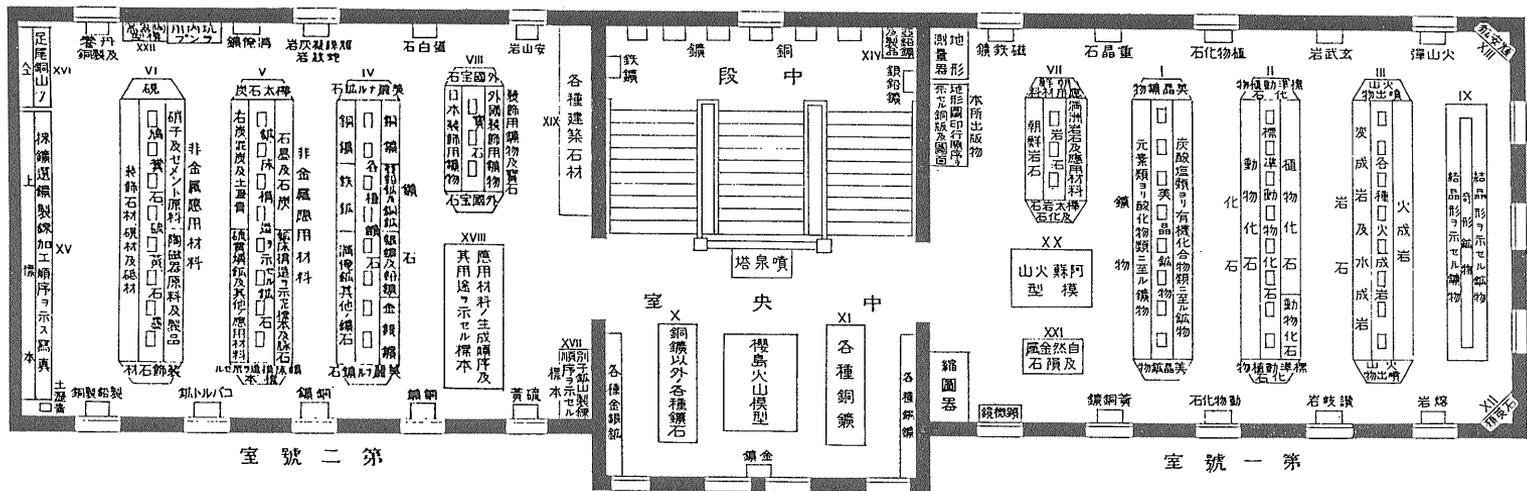
1) 元地質標本館長, 名古屋大学教養部: 〒464 名古屋市千種区不老町

キーワード: 鉱物陳列館, 標本展示

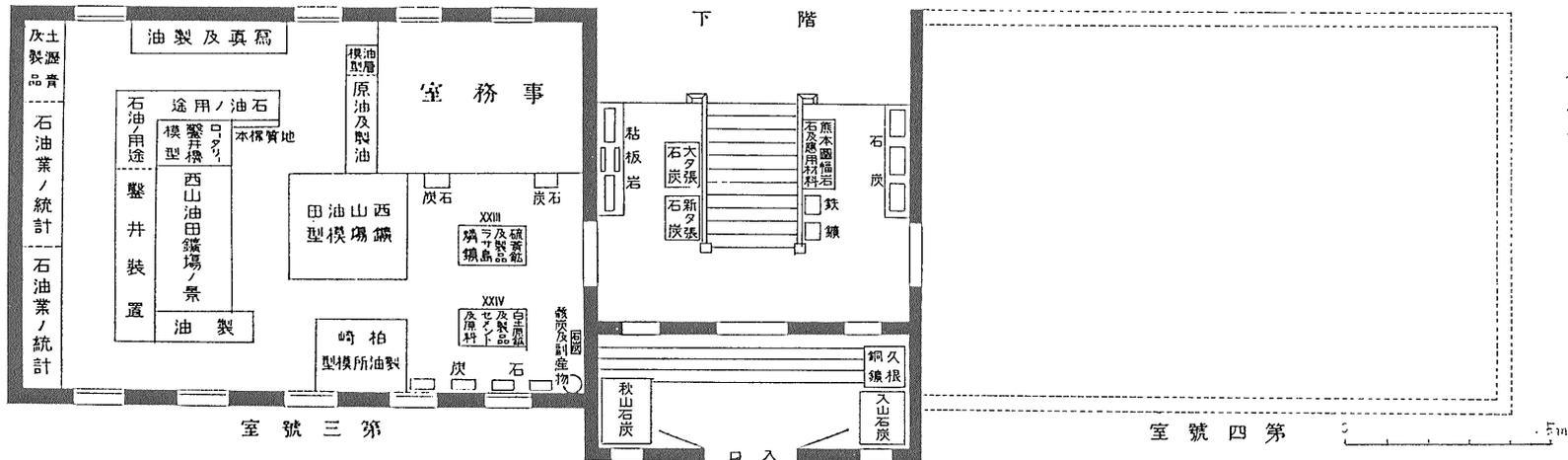
鑛物陳列館平面圖

縮尺百五十分之一

上階



下階



第1圖 大正初期の鉱物陳列館

表示の縮尺は原文のもの。本稿では約82%に縮少，スケールは、今回の掲載に当たって追加した。

蔵標本の一部を帝室博物館に出品して以て斯業の開発に資せり」と記されているところです。1906年(明治39年)に、地質調査所の庁舎がそれまでの麴町区道三町から京橋区木挽町に移転して初めて、公開展示施設—鉱物陳列館—の設置が具体化してきました。開館間近の頃の事業報告には、「目下整理中に属す。而して整理の遅滞する所以は一は専任技術官なきと、一は本所創立以来三十年の久しき年月に於いて採集せる標本の数多大なるに基因す」と書かれています。昔も今も変らぬ標本関係者の嘆きが他人事とも思えません。

さて、新装なった鉱物陳列館が晴れて開館し、一般に公開されたのは、1911年(明治44年)5月1日のことでした。30年近い中断期間があったわけです。開館当時は一号室と二号室だけでしたが、その時の展示の詳細は地質要報に、ショーケースの一つ一つの内容にいたるまで具体的な記録が残されていて、担当者の意気込みが伝わってくるようです。4年後の1915年(大正4年)には、第三号室もオープンしました。当時、第一号室では日本・朝鮮・満洲の岩石・鉱物・化石や、地形図・地質図作成の手順などを示し、第二号室は金属鉱物資源、第三号室は石炭・石油を始めとする非金属鉱物資源の展示を主としていました。第1図に示した平面図でそのおおよその規模と内容を推察して下さい。陳列—所蔵標本は、所員の採集品を主としていたでしょうが、所外からの寄贈・交換・購入もありました。寄贈品の主なものは、毎年の事業報告にリストアップされています。

この陳列館は、調査所本所とは別棟の地上2階・地下1階の建物で、農商務省本館から道路を隔てた裏手(調査所本所は農商務省本館の内)に、商品陳列館と向い合わせに建っていたようです。

1911年の開館以後は、各年度の入館者数が、月ごとに丹念に記録されています。それによると、各年度ごとの入館者は下のようです。

年 度	入 館 者 数 (1日当たり入館者数)
1911年(明治44年)(5月1日より)	9,074 (60.6)
12年(明治45年—大正元年)	16,827 (49.1)
13年(大正2年)	22,036 (64.2)
14年(3年)	20,858 (61.5)
15年(4年)	16,060 (47.1)
16年(5年)	16,756 (49.1)
17年(6年)	20,556 (60.1)
18年(7年)(8月15日まで)	7,086 (52.1)

明治末から大正前半にかけてのこの時期に、このような自然科学系の専門博物館が、毎年1.5万人から2万人の見学者を集めた、1日平均50人以上の入館者があった

1990年7月号

というのは、当時として驚くべきことではないでしょうか。その場所が、銀座のすぐ近くにあつて、地の利を得ていたとはいえ、今と違って大型バスを連ねて団体客が乗り付けるという時代ではありませんから、なおのことです。当時、ずい分と評判を呼んだのに違いありません。その頃の「東京名所案内」とでもいったガイドブックに、この陳列館のことが載っていないかと、気に懸けています。気付いた方がありましたら、地質標本館まで御一報いただければ幸いです。いずれにせよ、7年余りで約14万人の見学者を迎えたこの時期は、まさに戦前の鉱物陳列館の黄金時代でした。

なお、余談ですが、この時期の入館者数を月別に見ますと、10月と5月にピークがあります。現在のように、夏休みに集中するという傾向はありません。また、12月と1月は、年末・年始の休館を勘定に入れても、人数が半減しています。これらは、当時の庶民のどのような行動パターンを反映しているのでしょうか。

この黄金時代は、あまり長くは続きませんでした。7年後の1918年(大正7年)8月15日をもって、「改装のため休館」となったからです。この改装というのは、地質調査所が農商務省本館から出て、その筋向いの鉄筋コンクリート、地上3階・地下1階の建物に移ったことに伴うものようです。陳列館は、新しい調査所の建物の1階を占めました。改装には3年ばかりを要し、1921年(大正10年)5月に再開の運びとなりました。しかし、不幸なことに、再開後わずか2年ばかりで、1923年(大正12年)9月1日、新しい陳列館は関東大震災のため灰燼に帰してしまいました。この時、第三号室を除いて、すべての標本類は焼失してしまいます。まさに、事業報告にあるとおり、「将来再び獲ること能はざるもの甚だ多し、其焼失は独り本館の損失に止まらざるなり」です。

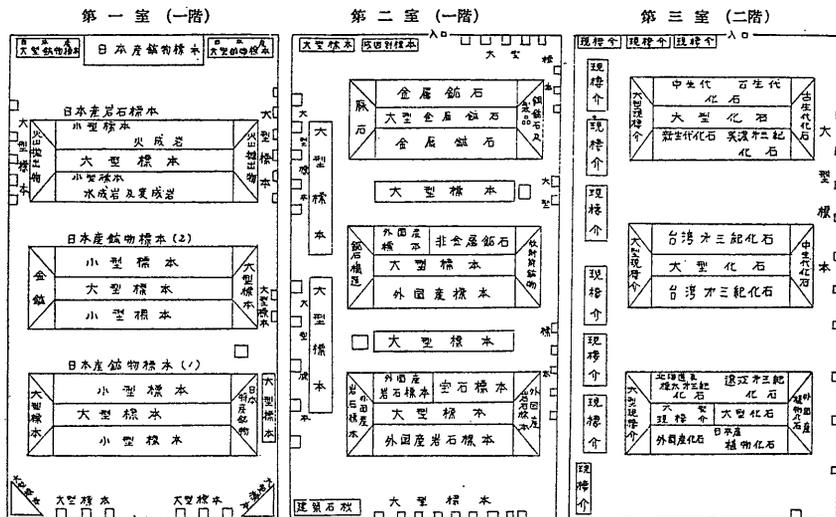
この時期の陳列館の規模・構成については、資料がありませんが、震災後に再建された陳列館と同様のものがあったらと思われまます。

再開後、震災までの入館者数は、下のようです。

年 度	入 館 者 数 (1日当たり入館者数)
1921年(大正10年)(5月20日より)	8,366 (28.5)
22年(11年)	8,439 (24.7)
23年(12年)(9月1日まで)	— (—)

震災後、鉱物陳列館の再開を目指して、標本類の整理補充、施設・設備の調整などの努力が続きます。所員の収集品のほか、多くの標本が所外・国外からも寄せられて、進捗状況は各年度の事業報告に示されています。

鉱物陳列館案内図



第2図 昭和初期の鉱物陳列館



第3図 地質調査所の展示施設の変遷

そして、震災から10年たった1933年(昭和8年)、再建された鉱物陳列館は、やっと開館にこぎつけました。同年5月17日のことです。この新しい陳列館も3室に分かれていて、第一室は日本産の鉱物・岩石標本、第二室は国内外の鉱石標本、第三室は主に化石を展示していました(第2図)。しかし、以前に比べると規模・内容とも縮小している——鉱工業との関連が薄れ、火山・地震などの自然災害も扱われていない——ように思われます。

再開後の各年度の入館者数は、下のようです。

年 度	入 館 者 数 (1日当たり入館者数)
1933年(昭和8年)	450 (1.5)
34年(9年)	301 (0.9)
35年(10年)	223 (0.7)
36年(11年)	243 (0.7)
37年(12年)	468 (1.4)
38年(13年)	549 (1.6)
39年(14年)	約500 (1.5)

再開後、7年間で入館者総数、約2,784人、1日当たりの平均で1人強、大正前半の黄金時代に比べて、なんと寂しくなってしまったことでしょうか。身近に迫りくる戦争の足音の中で、もはや人々は博物館を見学するような余裕を失っていたのでしょうか。そして、戦時体制下の所員増加のため、1939年(昭和14年)には陳列館の一部が実験室に転用され、さらに翌1940年(昭和15年)には、「陳列館の一般への公開を暫時中止」するに至りました。この中止が「暫時」に終らなかったことは、ご存じのとおりです。鉱物陳列館が、木挽町の庁舎もろとも、空襲で焼失してしまったのは、そしてごく一部を除いて貴重な標本類が永久に失われてしまったのは、戦争も末期の1945年(昭和20年)5月25日夜のことでした。

以上を要約すると、第3図のようになります。図のAミ目の時期は展示が公開の、実線の時期は非公開ないし半公開の期間を示します。(溝ノ口時代を半公開とした点については御容赦下さい)。こうして見ると、第1に気付くことは、地質調査所の展示の公開が非常に古くから行われているということです。少くとも、標本類を公開しようという努力はいつも払われています。第2は、それにもかかわらず、実際の公開期間が意外に短かい、ということです。木石陳列所が4年間、鉱物陳列館になって第1

期が7年、第2期が2年、第3期が7年と、戦前の70年の歴史の中で、公開期間は通算して20年位しかありませんでした。地質調査所は明治以来の日本の近代化の流れの中が活動してきたわけですが、関東大震災による焼失—その後、10年間の再開準備といい、大戦による閉鎖・空襲による焼失—その後、35年にわたる半公開期間といい、展示部門は社会の激動の荒波をもっとも直接にかぶってきました。そして、大正前期と昭和初期を比較してすぐ分るように、公開展示というものは、多くの来館者の直接の支持の上に成り立っているものですから、平和な時代でなくては成立しません。好奇心・向学心というのは、平和な時代にこそ充分に発揮されるでしょう。

地質標本館が筑波に開館してはや10年。この間はずっと公開を続けてこられたのは、本当に幸せなことです。この最長連続閉館記録が、今後どこまでも更新されていくことを望んでやみません。

SAKAMOTO Toru (1990): Short History of the museum attached to the geological survey of Japan at Pre-World War II.

<受付: 1990年5月1日>

地質標本館開館10周年記念行事

(1) 講演会

題 目: 恐竜時代と地球環境 —その進化と絶滅—

国立科学博物館地学研究部長 小島 郁生氏

地下からの手紙の解説 —宝石・鉱物—

東北大学名誉教授 砂川 一郎氏

期 日: 8月20日(月) (14時~17時)

会 場: 工業技術院筑波研究センター共用講堂

(2) 特別展 「宝石と貴石展」・「三葉虫の世界」

期 日: 8月20日(月)~8月24日(金)

会 場: 地質標本館

(3) 野外観察会 川原の石と砂金さがし

期 日: 8月26日(日) 場所: 茨城県大子町

(4) 小・中学生のための「岩石・鉱物・化石」相談

期 日: 8月27日(月) (10時~16時) 場所: 地質標本館

問い合わせ: 地質標本館 Tel. 0298・54・3751